

笛吹市探訪

笛吹市の史跡⑦

八代町の古墳

笛吹市には、古墳が非常に多く残されています。時代、規模、形もさまざまです。

この探訪シリーズでも、これまで岡・銚子塚古墳（八代町岡）、姥塚古墳（御坂町井之上）、積石塚古墳（石和町松本、春日居町鎮目）についてご紹介しました。今回は、八代町に残る興味深い古墳のいくつかを取り上げます。



地蔵塚古墳

地蔵塚古墳

八代町南にある円墳です。直径は35メートル、高さは5メートルあります。規模は県内でも大きな方です。

遺体を納めた石の部屋は、横穴（こあな）から入る方式（横穴式石室）で、南西側の墳丘のすそ部にその口を開けています。部屋の壁は川原石を積み上げて造られており、特に奥壁と天井には非常に大きな石が使われています。遺体とともに置かれたであろう品々（副葬品）は、残念ながら発見されていませんが、この古墳は、その地域で権力を振るっていた人物の墓であろうと思われまます。

造られた時代は、石室の造り方から、姥塚（つばつか）古墳と同じ6世紀終わり頃と考えられています。



銅鏡（団栗塚古墳出土）



団栗塚古墳

団栗塚古墳

この古墳は、八代町北にある熊野神社のすぐ東にあります。呼び名は「ずんぐりづか」です。

本来は前方後円墳だったようですが、明治22年の道路工事で壊されてしまい、現在は後円部のみが残っています。

工事の際、後円部の頂上に、遺体を埋葬する施設が2カ所見つかりました。一つは竪穴（たてあな）式石室とよばれるタイプで、もう一つは組み合わせ石棺です。現在も、それらに使われた石材の一部を見ることができます。

竪穴式石室からは、刀が2本、矢じりが10本発見されています。また、組み合わせ石室からは、刀1本、玉類のほか、直径11・5センチメートルの銅

鏡が1枚見つかっています。古墳が造られたのは、5世紀後半と考えられています。

狐塚古墳

八代町南の中央道と県道に挟まれた地区にある古墳です。

前方後円墳の「前方」部が短い「帆立貝（ほたてがい）式古墳」と呼ばれる形をしています。発掘調査はまだ行われていませんが、後円部付近では、埴輪（はにわ）の破片が採集されています。

昭和初期に前方部に土俵を作った時、鉄剣（両刃）、鉄刀、鉄銚（てつこ）が見つかっており、時代は、5世紀後半と推定されています。



狐塚古墳